

## 聖金曜日・主の受難

福音朗読：ヨハネ 18・1～19・42

2026.4.3

カトリック高円寺教会 19：30

主任司祭 高木健次神父

今日、聖金曜日は、イエス様の受難、特に十字架上での苦しみを思い起こしながら、わたしたちは今、典礼を行っているわけですが、イエス様の十字架の苦しみのというのは、十字架にかけられたその肉体的な痛みということではありません。むしろそれが表しているのが、人類の全ての苦しみをイエス様がわたしたちと共に担ってくださっているという、そのしるしが、イエス様の十字架上での肉体的な痛みということ言えると思います。

だから、神である方の苦しむ姿である十字架がわたしたちにとっての救いのしるしなんだというのは、イエス様の時代の人たちがタイムスリップして見るならばびっくりするような——ちょっとおかしくなったんじゃないかぐらいの——ものかもしれませんが、イエス様が全ての人の痛みを一緒に担ってくださることを通して、神様とわたしたち、イエス様とわたしたちの繋がりができる、そこに救いがあるんだというメッセージを思い起こさなければならぬですね。

痛みというのは、自分の側に原因がないながら苦しむ場合もあります、色々な形で——病気とか、災害、あるいは他の人の罪の結果として虐げられるとか。そういう他の人の罪の結果としてだけ自分の側には原因がないという痛みだけではなく、イエス様が担われるのは、わたしたちの側に原因があり、自分で自分を苦しめるって——罪の結果と言いますが——その痛みも色々なことが思い浮かぶと思いますけれど、その痛みも担われるし、また、わたしたちが色々な欲望に身を委ねることを通して目を逸らそうとしている、心の深い部分での痛み——神様と離れているということから来る痛み——も、イエス様は目を背けるのではなく直視するということを通してわたしたち以上に担ってくださる、そう信じてるわけです。

だから、十字架上のイエス様は、神様としてのイエス様のみこころは、世界中のわたしたちも含めて一人ひとりの——今の時代の者だけではなくて、世界始まってから

今に至るまでの——一人ひとりのいろんな形での苦しみを全部思い浮かべながら、そういう苦しむ者たちと共にありたい、その思いで、そういう意味で、人類に対する愛によって十字架の苦しみを引き受けられたというところに、わたしたちはそれぞれが救いの入口なんだ、イエス様が共に苦しんでくださりながら、苦しみを通してわたしたちは孤独なのではなくて神ご自身と繋がるんだっていうことです。わたしたちが何もしなくてただそれが取り除かれるっていう——麻酔で眠ってる間に患部が取り除かれますっていうことではない——一緒に苦しみながら、でもその共に苦しんでる方と関係が深まっていくんだっていうところに希望があるんだと思います。

今日、わたしたちはこれから十字架礼拝、その前に共同祈願で、一緒にお祈りするわけですが、2つのことを思い起こすように招かれていると思います。1つは、今それぞれの、一人ひとりが抱えている痛み——それはどんなことが原因であれ——その痛みをイエス様が分かって、そして担ってくださっている、だからそれを通してイエス様との繋がりが深まるんだということでもあります。

そしてもう1つは、わたしたちもイエス様のような心を部分的にでもいただく、それは他の人の痛み困難に対して無関心なのではなく、その人と共に担おうとする——完全に肩代わりするという意味ではないです——、心を向け、頭を悩ませ、どうしたらいいのか、人類が互いにその他者の痛みに関心なのではなく、自分も同じように担うように招かれている、そしてそれが可能なのはイエス様の心をいただくからなんだと、自分自身の痛みはイエス様との繋がりの入口として新たな光で受け入れ、そして他の人に対してはイエス様と同じような心を持つようにということを願う。それが十字架を礼拝するわたしたちの招かれている思いなのではないかと思います。

今日十字架を通してわたしたちと共に歩もうとされる神様の、イエス様の愛が完全に示されているということを記念することを通して、一人ひとりがイエス様との繋がりを深めていくことができますように、恵みを願い合いたいと思います。

---

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>